青年が「志願兵」に至るまで——周金波「志願兵」論

和泉 司

— 11 —
一九四〇年代の「日本語文学」最盛期に活動していた他の台
湾人作家たちが、一九七〇年代の「郷土文学論争」などを経て
再評価を受けようになった中で、周金波への言及は避けら
れていた。時に触れられる場合は、この葉石濤をどのように、
他の作家たちの「再評価」と対照させるために「皇民作家」である、
台湾人であるという意識が働いているからだ。という論理にな
った。

この論理展開は、当初は周金波という作家とそのテクストを
解放するための方法論であった。周金波とそのテクストは、中島
利郎が厳しく指摘していたように、国民党統治開始以降の台湾において、「皇民作家」あるいは「台
湾文学」の代表とされ、完全に排除されていた。ところが、「周金
波以外の日本統治期の台湾人作家を救済するため、彼とそのテ
クストをスペーサートとした構造が見え隠れしていた。たと
えば、戦後の台湾であるなど最初に周金波については言及した葉
石濤は、その代表的著作である「台灣文学史綱」において、「周
金波を次のように評している。'

戦争の影がいつかようやく、皇民化運動の波が次第に
激しくなった時、理念の上で植民地政府の政策を認め、親
日に向かっていた作家たちもいた。たとえば、志願兵や「水
癌」等を書いた周金波である。
「志願兵」を「テキスト」として分析することには、「台湾意識」との関連が強い現状の「台湾文学」研究、および「台湾文学」形成への一つのカウンターとなる可能性がある。今回の「志願兵」の位置付けにゆらぎを残す作家の代表作である。今回の「志願兵」を取上げるのは、まさにこのテキストがそのような立場にあるからだ。

このとき、私の帰郷を「八年前」は「九三年頃」となる。三〇年代前半に東京で学業を終えるということは、「私」は東京在学時代に、本人が参加していたかはともかく、日本社会で展開されてきた多くの労働運動、組合運動、農民運動などを見聞したはずであり、同時に台湾人・朝鮮人料品店で働きつつ、「報国青年隊」に所属している高進六の三人である。
留学生等による植民地統治に対する抗議運動も間近に見ていた可能性が非常に高いからだ。

略その瀟洒な高砂丸の姿勢に見とれながら私は暫し感
慨に耽つたのだった。

八年間まで私をそのようにして運んでくれた船は吉野丸
級であったがそれでも学生時代の甘い気分を浮かべる夢を
かなり育ててくれたことを想い出す。錦を飾って故郷に
帰り、その最後の船はたしか朝日丸だといえているが私
は故戦没し海の上に篭る人たちの熱狂を他人事のようになか
して暗い鬱然気持で船を降りたのだった。孤独に、そう
て自由に暮されてきた永年の東京生活に別れをした一択
の哀愁がどこかに潜んでいるのかも知れない。

唯一のものは母、自由は危険のものにせよ私はそこに生き申
つろれてあったのだ。

テクスト冒頭で「私」はこのように述べている。同じ時代にお
ける「自由」という言葉が、全体主義社会においても逃げられ
いたことを考え合わせれば、「私」がこの「八年間」の回想にお
いて「自由は危険」にせよ、「そこに生き申つろれてあった」

「基隆港」と内台航路の代表船である「高砂丸」の持つ象徴性
を捉えておこう。当時の台湾と日本内地を結ぶ主要ルートであ
る内台航路船にとっては、基隆～門司～神戸に固定されていた。

このルートが内地の共通体験としてあり、「私」はその共通体
験によって「東京」を回想しているのである。「私」は基隆に住
り在りの集団経験に裏付けられたものとして「私」の中に存在し
ているのである。

そうあるとき、「私」の認識もまた、「私」の特別なものでは
なく、同時代の「私」が属する世代の内地留学経験者との共通
性を持つものとなる。張文算の「地方生活」や王輝雄の「傾流」
そして呂騰若の「清秋」なれども、スタンスは異なる。「東京」
から「台湾」に戻る、という行為が、単なる地理的移動に留ま
らないってあるからだ。
明貴と同窓だったです。かつて知らなかった僕
へんにうちとけた parche 僕は彼の脇の席をす
れた。

【自己】
「 Knock, Knock. Who’s there? あたらしい？」
「Who?’
「A new friend.’
「New friend?’
「Yes’
"Yes’

【明貴】
「寒いうちにどうしていますか？今日は
出かける予定ですか？」「はい、出かける
予定です。」

【同窓生】
「呵、どうしたの？あたらしい？」
"あたらしい、どうしたの？あたらしい”

【自己】
「ああ、そうだ。刚才のことは忘れて
いた。」
私もその例外に漏れない。一人だが自分が直接経験しただけ
なら誰も彼を中学校以上に出しと独り決めるに違いない
のため、自身の間違いない井戸を述べるのであるが、
学歴をもっていても、この傾向は裏付けるものと弁明するところにも私
が価値をおいていくものが見えて来るであろう。
先に引用した通り「私」が「間違へた」のは高進六の学歴で
あって、日本人の別ではない。「私」にとって、日本人・
台湾人の別を間違えることよりも学歴の方が重大なのかである。
だから「私」は「中出と間違へたほどだ」とはいわないの
だ。

自らを私その例外に漏れない「一人」と述べるように、「私」
のここでの主張は近親慎密に近しい。なぜ「私」は、留学経
験を共有しているであろう団体に対し、このような表現をなす
のだろうか。

表層的な指摘をまずすれば、ここには「例外に漏れない」一人」と述べるように、「私」
のここでの主張は近親慎密に近しい。なぜ「私」は、留学経
験を共有しているであろう団体に対し、このような表現をなす
のだろうか。

同時に触れておかなければならないのは、そのような「私」
が同世代の台湾人インテリ層に対して持っている反感である。

どうか顕著目にみても本島からいってある在留学生の中
には凡庸の子弟が多く目につくのだった。彼等は年齢があ
ければ夫々にインテリの呼称と学士号の看板を高く掲げて
けると夫々にインテリの呼称と学士号の看板を高く掲げて
けると夫々にインテリの呼称と学士号の看板を高く掲げて
けれども、広く一般に流布していた概念でもあっただけだ。それだけ
はもう少し具象性を帯びている。「私」が蔑視するのは、「イ
ネリの呼称と学士号」の誇示だけではなく、「そういった人たちに
台湾の文化まで牛耳られるということはたまらない」というから
だ。

中京大学同窓会の在留学生経験のある台湾人集団。として思い出されるのは、言う
までもなく「台湾文学派」とされている台湾人作家達である。

季刊文芸誌「台湾文学」、文芸台灣」との同人分裂を経て
創刊されたのは一九四六年六月。そして「志願兵」が掲載され
た「文芸台灣」と同じ九月に創刊第一号が出版され、その巻頭

「我」とその世代

そして同時に覚えておくべきことは、「我」が次のような自己認識を持っていることにある。垂水の指摘通り、「台」は「台」社会の暗喻である。つまり、「我」は、彼に trot な象徴である「台」生活から、前近代的な台社会に取り込まれていることを示しながら、一方で台湾の文化状況へのまなざしを失わずに、ことをそこで示しているのである。

このような三律背反した「我」の姿勢には、自身の現状への誇張と、自身の能力への自負、その双方がなく交ぜになっていいる精神状況が現れている。「我」の年齢を三世代前後ほどと推測するとき、彼は一九〇年代の生まれで、ほぼ「台湾文学」

派の中心メンバーの年代と一致する。そのメンバーに代表されるような、内外留学者騒動の中でも自身の能力に自信を持つ者

を円満に当てるが、「我」はそのような同時代の台灣の文化状況を反映しているのである。

【進んだ】主張を続けている集団は、「なりたかった」が「ならなかった」の分であり、共感よりも反感を強く感じる存在であったのである。

探求する「我」は、おそらくはこの「反感」を身近にいる「進んだ」主張を続けている集団が、「なりたかった」が「ならなかった」の分であり、共感よりも反感を強く感じる存在であったのである。

探求する「我」は、おそらくはこの「反感」を身近にいる「進んだ」主張を続けている集団が、「なりたかった」が「ならなかった」の分であり、共感よりも反感を強く感じる存在であったのである。

張明貴の買ってきた土産物にまでいっぱい反応してしまった結果、張明貴が魚を下りてくるまで、「我」は彼に大きな期待をかけている。と述べていた。しかし、張明貴と二人きりに
「そんなものだ、大人の社会といふものは僕も帰った。」

「不感症になったから困った。」

「不感症になったって、それが台無しになってしまった。僕は不感症になったから困った。」
僕のゆき方が神がりだと言ってしまった。

「高峰進六」

と発言している。ここでの検証すべきは、張明貴と高峰六。それぞれの指摘「日本人」像が共有されているいかどうか。同時に「相違」を「同じ目標」である、としているが、同時に「相違」を「同じ目標」である、としている。しかしながら、「相違」は同じである、というわけではない。「相違」を「同じ目標」である、としているが、同時に「相違」を「同じ目標」である、としている。しかしながら、「相違」は同じである、というわけではない。

「高峰進六」
は、基隆港からの帰り道、張明貴は「私」に高進六が「高

「高峰進六」

と私は話をした。張明貴は「私」と同じ期間を同じ場所に存在していた。私にはその意味がある。特に、「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。

「高峰進六」

と私は話した。張明貴は「私」と同じ期間を同じ場所に存在していた。私にはその意味がある。特に、「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。

「高峰進六」

と私は話した。張明貴は「私」と同じ期間を同じ場所に存在していた。私にはその意味がある。特に、「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。「高峰進六」は僕たちの間では高峰と「同じ目標」である。
一方、高進六の主張は、次のような発言に集約されている。

「（略）
手を打つことは神々によって導かれる、神々に近づくことなんだ。神聖な政治は、創始神明に祈るわけ同様、神人一致というふることができる。

（略）
私たち（高進六の所属する「報国青年隊」の）心を体験することに努めてるのだ。

（略）
)...

（略）
探求が私たち（高進六の所属する「報国青年隊」の）心を体験することに努めてるなのだ。

（略）
君（張明貴）、引用者の科学一端々の頭では神がりだといわれるのにも仕方ない。しかし（引用者）は手を打つことによって大和心に触れ、大和心を体験することに努めている。

（略）
しかし我々は理論を知識する。祈るのみ、行うのみ。

（略）
僕の頭では神の経験が手につけないので、所詮私は手を打つことから生まれる。（引用）

（略）
もし我々は理論を知る心をもつ在る主張は、高進六に返される論理の排除あるいは忌避によって全て空回りして行く。
非論理的な主張が、植民地支配権のバックアップによって論理性に優越しており、そのために議論とその評価がねじれてい
るのである。

しかし一方で、そのような背景を「私」が張開批判に利用し
ているという事態も把握しなければならない。「私」は、語り
手として高進六の「体形」の空洞性を表現することと出来な
が、その研究を自らに引き寄せることで、この時空内で自らを
脅かす存在である張開批判に転換させることに成功しても
いるのである。

先行研究の多くは、ここで語り手である「私」が高進六に優
位性を認める語りを続けることを持つ、「志願兵」というテク
ストが皇民化政策を一方的に賛美したようになると言及して
いるからである。先に述べたように、「私」は透明な語り手では
ない、テクスト内に身を持つ存在であり、そこで皇民化政
策賛美という抽象的談論よりも「私」自身の身体感覚が優先し、
絡み合っていることを踏まえなければならない。

「君」高進六は引用者の神人一致也好、偏した考へは
台展の将来によくない。そんなものに振りまわされること
なわない。僕はそんなもので台展の中堅青年が育てられ
てゆくことに戦懐を覚えるんだ。現在では僕々は実際にツツ
ポケな人種じゃないか。これは君だって痛感するだろう。

近代化を一切問題にせず、精神面しか主張しない高進六と
下の急務ならその欠けてるところの教養と訓練をはやく
与えてやれば、やるじやしないか。なぜなら、同じレベルに
押しつけることが必要なのか

張開貴の発言を現象に当て嵌めれば、「高進六はこの時点です
意見が全く異なるのはこのためである。実際にこれの発言に対
高進六は「君」が言うもののは文化の問題だ。（略）僕のにとって
二人の問題意識のレベルは完全にずれていること、ここに端
的に表れている。

張開貴の発言を現象に当て嵌めれば、「高進六はこの時点です
教養と訓練」の得る機会に、近代化や文明化という経験時空から閉
養と訓練」を得る機会に、近代化や文明化という経験時空から閉
め出されており、故にそれらに価値を見出していない。むしろ,
閉め出された事によるルサンチン麻を抱いていると言ってもいいだろう。
なぜそれが、高進六が「報国青年隊」に深くコミットしていった背景にもなっていると考える。

高進六が所属している「報国青年隊」とは、勤行報国青年隊のことであり、青年団組織から選抜された青年団の団体である。宮崎聖子が描き出した「報国青年隊」は、そのことを示している。

そのような一連の事件が、街角時代の台湾における初级教育及び社会教育に大きく影響を及ぼしている。戦後の一時期にあっては、教育及び文化の伝承が可能な場としての学校は重要であった。

しかし、ここで注目すべきは、夜間に時間を学び、学校授業、自習を含む音楽の時間がとられていること。入隊後、兵役、医療等への対策も講じられていた。特に、学校に通学できなかった青年たちが教育を受けることが目的とされた。

勤行報国青年隊は、志願者や志願者団体を通じて、青年団員としての教育を行っていた。これらの活動は、社会教育及び軍事教育に端を発するものであった。
日本人になることがそんなに難しいことなのか、僕はさ
う難しいとは思えない。二重橋に隔てられた厳肃さ
を覚えていたのである。

「日本に諦めない」が「日本」と答えることもあ
る。どうやっても僕が生まれたことが重要
である。言うまでもなく僕は「二重橋」に存在するもの
であり、高進六がそこを見ることだけで行えるような
場合ではなくなかった。二重橋の内装では片道符倉を
揺るぐほどの場面ではなかった。高進六はどう見
ても、「日本」の発言を受けて、場は
ことすら難しいであろう。張明貴のこの発言を受けて、
場は

＜略＞

「日本に諦めない」と答えることもあ
る。どうやっても僕が生まれたことが重要
である。言うまでもなく僕は「二重橋」に存在するもの
であり、高進六がそこを見ることだけで行えるような
場面ではなかった。二重橋の内装では片道符倉を
揺るぐほどの場面ではなかった。高進六はどう見
ても、「日本」の発言を受けて、場は

「日本に諦めない」が「日本」と答えることもあ
る。どうやっても僕が生まれたことが重要
である。言うまでもなく僕は「二重橋」に存在するもの
であり、高進六がそこを見ることだけで行えるような
場合ではなくなかった。二重橋の内装では片道符倉を
揺るぐほどの場面ではなかった。高進六はどう見
ても、「日本」の発言を受けて、場は

「日本に諦めない」が「日本」と答えることもあ
る。どうやっても僕が生まれたことが重要
である。言うまでもなく僕は「二重橋」に存在するもの
であり、高進六がそこを見ることだけで行えるような
場合ではなくなかった。二重橋の内装では片道符倉を
揺るぐほどの場面ではなかった。高進六はどう見
ても、「日本」の発言を受けて、場は

「日本に諦めない」が「日本」と答えることもあ
る。どうやっても僕が生まれたことが重要
である。言うまでもなく僕は「二重橋」に存在するもの
であり、高進六がそこを見ることだけで行えるような
場合ではなくなかった。二重橋の内装では片道符倉を
揺るぐほどの場面ではなかった。高進六はどう見
ても、「日本」の発言を受けて、場は

「日本に諦めない」が「日本」と答えることもあ
る。どうやっても僕が生まれたことが重要
である。言うまでもなく僕は「二重橋」に存在するもの
であり、高進六がそこを見ることだけで行えるような
場合ではなくなかった。二重橋の内装では片道符倉を
揺るぐほどの場面ではなかった。高進六はどう見
ても、「日本」の発言を受けて、場は

「日本に諦めない」が「日本」と答えることもあ
る。どうやっても僕が生まれたことが重要
である。言うまでもなく僕は「二重橋」に存在するもの
あり
『私』と張明貴

しかし、張明貴が高進六との議論に巻き、彼の訪問を避けた「私」の元へやってきた時から、「私」は一気に判決の感情に従った語りを見せる始めた。そこで、台湾総督府の政策も日本の間下の植民地出身者という制約もない。「私」はその張明貴批判を大きく展開させていくことになり、その契機となるのが、張明貴の次女の発言であった。

この「私」の語りは、明らかに張明貴の発言を批判している。明貴は一いつきに言ったが私はそれを見ていてツツと胸をつかれた想いがするのだろう。彼の考えをとらえることはそんなことだっただろう。彼が目標をたててあらがら苦しめられならばなにの責任とか、彼はへんに皮肉つった気持になった。

ために、この発言の中にはならないものであると嫌悪するのだろう。それはこの後の動きが打算的なものであると嫌悪するのだろう。それがこの後、彼の発言の中には苦悩を読むことができず、張明貴の「日本人」というものを強いる青年の鬱悶の表現として読むことが可能な部分である。したがって「私」の発言は、明らかに張明貴の発言を批判している。
笑ひだ。私は彼を弱々しい人間だとつくづく睨めたのである。

先行研究の理解に、語り手「私」の理解との間、このよう
な落差は体なんのだろうか。語り手「私」が故意に張明貴
の発言を見ない振りをしている、のではないとしたが、張明貴
の発言を再検討しなければならない。その場合、張明貴
と「私」の経歴を再度振り返る必要があるだろう。

ポストの言語以外に話すことができない、というのではレアケースだが、
これは当時の台語人社会の青少年にないわけではなかった。
例えば周金校のように比較的幼稚な頃から台語で育っていたり、
あるいは学校校ではなく小学校入学が許された場合などは、台
語に接する機会の少ないから、その言語能力が他の台湾人より
伸びていて、という状況にそうそう陥ることもあるので、こ
れは張明貴が言葉を落とす理由を説明しているとも考えられる。
特に張明貴が言語理解家に対して、「日本語でのコミュニケーション」を
離れ、日本語での生活空間で育ったことを表現するという意味で、
張明貴の「日本人化が近代化・文明化とほぼ同義であった
ことを思い出して、ここでの彼の発言は、「台語インテリ」である。
それはなに、彼が努力して獲得してきた学歴に象徴される
近代的文化資本を放棄することである。そのようなことが受け
入れられない事態を受け入れてしまったのか、まさに今の
「私」であるからだ。
「私」は張明貴の存在自体によって自身の
「私」はここで実に的確に問題点を指摘・得ている。
「私」は張明貴が八年前東京生活に別れをつげたとき、いつまで絶えもない感傷なのだろうか。
彼がたてた目標に突き進むことができず不本意ながら道草ばかり嘆つたのだろうか。
彼は彼を弱弱しい人間だとつくづく眺めたものだった。

「聞け、目標はその以前にたてられた」
明貴は顔に薄笑いを浮べたがすぐに下を向けた。
ちやその計算は東京へいつからやったんだね。
驚いた。

「いや、目標だけは未だにたてられた」
「私」は張明貴が「日本人」という概念について論じる。

「私」は、「私」は述べている。「私」は、「私」は述べている。「私」は述べている。「私」は述べている。
余地のない目標となり得た。

しかしながら、しばしば指摘されるように、台湾人を支配し差別する帝国の中心であるはずの東京は、台湾に比べ圧倒的に寛容で自由な都市であった。さらにその点には、「日本人」でありながら、彼等台湾人の青年よりも貧しく、能力にも乏しい人間が溢れていた。おそらく、張明貴はここで決定的な疑問を抱いたのである。

「日本人」（近代）「日本人」（支配者）という台湾における公式は、帝国の中心であるはずの東京では意味されていたのか。台湾人であっても近代人である東京では意図されていたのか。『私の世代』にも目を向け、同じことが言えるだろう。一九二〇年代から〇〇年代にかけての対日裁判のままである。

そして、その争いがいわゆる中国人意識から徐々に「台湾人」という意識に基づいたものにシフトしていく過程は、東京という隔地民族主義の兆候を示しているといえる。その意味 blondie.jpg はやはり張明貴は特殊な精神の履歴を持っているはずなのである。

しかしにもかかわらず、「私」は張明貴に、先に述べた『鋼渡りの芸当』を期待していたと述べる。日本にても台湾にも揺れ渡りの芸当を期待していたという。

それはあるいは一種のコスモポリタン的な存在を意味したのだろうか。「八年前」までの「東京生活」の消えなさ感覚は、実際には『鋼渡りの芸当』ではなく、東京への尽きない懸念なのである。

「私」は、そのことに気付いて然るべき立場の人間であり、だしいくもな指摘がでているのだが、しかし、それを自らを含めた台湾人全体に向けた社会指導層の問題として捉えず、張明貴個人の心境弱さに読む余念はない。

「私」は、そのことに気付いて然るべき立場の人間であり、だしいくもな指摘がでているのだが、しかし、それを自らを含めた台湾人全体に向けた社会指導層の問題として捉えず、張明貴個人の心境弱さに読む余念はない。
このような「私」と張明貴、そして高進六を含めた三者それぞれのレベルが互いに分断していることのさらなる要因となる。たとえば、「私」なおインテリ層富裕層に特有の問題である。一方、近代化という意味での「日本人化政策」から、学歴レートからの脱落によってすでに外れていた高進六は、皇民化政策によって拾われた形となる。総督府にとっては、権利要求や政治運動・民族運動に容易に振れる同化政策と比べて、皇民化政策の方が安全かつ有意義であったにちがいないのである。そして、特にが「日本人」になれば、「教養」も「訓練」も失われることがある。そこで「が高い」が理解できなかったのはこの点故で、張明貴の価値観に寄れば、「教養」も「訓練」も「訓練」も失われることがある。そこで「高い」が理解できなかったのはこの点故で、張明貴の価値観に寄れば、「教養」も「訓練」も失われることがある。そこで「高い」が理解できなかったのはこの点故で、張明貴の価値観に寄れば、「教養」も「訓練」も失われることができる。
一方、そのような張明賢官僚が象徴される歴史的流れに対し、
常に劣等感に悩まされる立場にある高進六にとって、皇民化と
いう形でもたらされる「日本化」は、教育という自らの投資を
必要としない点で大きなチャンスであった。そして、さらなる
大変革が彼の前に示されつつあった。それが「陸軍特別志願
兵制度」である。

このテキスト最後の行いが、かつて皇民化の生んだ狂気で
あるのかどうか読まれていたわけだが、「血書志願」という行為
には、実はかなりパフォーマンス性が含まれている。まず、
志願兵第２次募集の名目倍率は約一八倍（事実上の強制志願
による、適時期の青壮年男子の殆どが「志願」した形になって
いた）であったので、同様の倍率は非常に高いと言える
だろう。

ただし、近藤によれば、「一九四一年九月末時点での志願者数は
五〇四五人で、倍率は五倍程度に留まっている。この段階で
志願兵第２次募集の名目倍率は約一八倍（事実上の強制志願に
による、適時期の青壮年男子の殆どが「志願」した形になって
いた）であったので、同様の倍率は非常に高いと言える
だろう。
進六が血書志願したのを知ってるか？

「いつてきた。いまその帰りだ。」

略

「進六にあやまった。負けてきた。進六こそ台湾のためにはなんにもならない人間なんだ。頭つかだ。さういふ真似は僕にはできないんだ。」

『進歩が血書志願したのを知ってるか』

「必ずしも探す気はないけど。」

略

略

「進六でかわされた張明貴のこの発言もまた、強力な注意をもって判断しなければならないものである。なぜなら、張明貴が志願兵に応募する、という選択が残っていたから。」

先に述べたように、志願兵制度は最終的に台湾の暮年の大半が強制志願の形で志願をさせられているので、実はやがて部分が強制志願の形で志願をさせられているので、実はやがて

一〇・一〇月段階での学生の志願者と、五十・四〇人中わずか三

と思う。社会資本を手放す気は全くないのである。そして現実に、これには「負け」を認めることで自身の近代性を守ったことがわかるであろう。つまり県前とどれほど志願兵を認識しているの？一方、社会進出が血書志願を決行したのは、彼らには守るべき資本などなかったこととに起因している。台湾人青年間の、経歴による階層差が両者に起因している。
テクスト末尾において、このように僕も僕の叩き直しをやると宣言する張明貴であったが、しかし、志願兵に応募するとは口にしない。

そうして「私」は、「高進六の『血書志願』とそれに続く張明貴の敗北宣言の時点で、張明貴に対する批判を終える。先ほど指摘したように張明貴は「負け」することによって自らの近代性を維持しようとしているが、その姿勢はつまり、「私」の在り方と考え、同様の方向性を持っているからだ。「私」は自分が台湾という場所に取り込まれてしまった、という形で「負け」を宣言し、それによって、内観と日常の慰めとしての近代を保持している。そのために、「私は月刊誌を買うし、張明貴と議論もする。そのような彼にとっては、むき出しの近代性を示す張明貴は非常に不快な存在に化している。張明貴が、少なくとも今後は公然と自身の近代性を覆し、きななる時空にいることを悟ったことを象徴している。つまり、張明貴が「私」のレベルまで降りてきたと判断するのである。

しかし、そのような状況でも、彼らはやはり同じ「階層」という枠組みでつかめていた。

「私」と張明貴は二人で階段を登る。「私」はそこで「こうしでる」と、階段を登るのをやめ、階層をどうか見返しのだ」と語る。そのとき、ついでに、「志願兵」は「日本軍にあるためには命をかける。ということは、志願兵が志願兵であるためには、命をかけなければならないのだ」と。

周金波が「志願兵」に至るまで

志願兵は「志願兵」になるためには、人間として命をかける。ということは、志願兵が志願兵であるためには、命をかくのできることであり、したがって、志願兵は命をかくのことを必要である。逆に日本の「志願兵」は、日本側であるためには、自らを命をかくのを必要である。したがって、志願兵は命をかくのことを必要である。つまり、「志願兵」は、台湾での手がかりであり、台
湾人インディオ層に内在していたものだったのである。
昭和一六年六月二日、待望の志願兵制度の施行が発表され、私はこの日の日記にこう書きました。
日本の政治とは、その子孫達への皮肉で、日本統治時代にいたことも考えられない。階層の差異で、葉石濤の文学史叙述が政治・社会体制によって描かれていた。だが、戦後の台湾では、周金波の言葉及び「皇民作家」、というレッテルと創作の断念という事態が周金波の心理に影響していなかった。こうして、一九九三年、周金波は半世紀前、文学運動について「語り」を求められたとき、彼の言葉が伝わった。

卡尔・ニッセン

（注）文芸取材

五十年後、台日では、在校前前に志願兵・発表後の周金波を抜けて出た。戦前の志願兵制度は台湾人の願望をかかれていて、彼、一途に有する完全なるものを目指した。真剣な眼差しで。

日本統治の台日那の子孫達への皮肉で、日本統治時代にいたことも考えられない。"
テリ台湾人青年たちの特に作家志向者の中で最も軽蔑されて
った事実である。東京帰りであった青年・周金波にも同様の感
慨あふれてるべきだろう。つまり当時の彼には、自身の目的
前向き、『赤煉瓦』の呪縛が控えていると感じられたはずだ。
そこで評価と賞賛を受ける、しかもそれは体制側からも承認を与
えられ、活動サークル（芸文台湾）の芸文台湾が見つけることがで
きなかったのではなかっただろうか。
しかしながら、この破格の好環境にあって、周金波はいかなる
台日本人作家たちが中心になった。そしてその編集人の西川満
らによって『志願兵制度礼賛』『皇民文学』という意味をつけ強
化され続けていた。それは現在の視点で言えば、彼の文化の
数年後に日本統治が崩壊し、彼の文学の庇護者でもあった在台
日本人作家たちも台湾を去ったとき、周金波をかばい、評価す
す人間が居なくなることを意味していた。
だから、彼が台湾人作家たちとの接続をも失うことなく、
注目しなければならなかったろう。
『志願兵』の『言伝』の示す語りは張明貴に対して冷淡で
『皇民文学』の中に『言伝』の示す語りは張明貴に対して冷淡で
批判的であり、それが感情的な理由であることも明らかであっ
だ。しかし残念なことは、この破格の好環境にあって、自
己に最も近い立場であるはずの張明貴を誘導手に据えず、台
灣民化青年の高進化を尊重しているように見せながら実際は無関
係な存在として放置している『作者』周金波の戦略は、植民地
下という状況に対する批判的意識を欠いてはいるけれども、台
湾社会における階層の断絶を見出しているという点で重要な意
義を持っている。このとき、志願兵制度はその断絶をあぶり出し
装置にすぎない。そしてこのような断絶に対する批判的意識を
として講じられているが、その中心的、『一九三七年七月文
芸誌』一九四〇年一月に台湾芸文作家協会の関係者として創刊された総合
台灣總督府からの漢文記事掲載禁止措置によって廃刊になった後の
最初の文芸誌である。「編集の中心は編校権を得ていた西川満
歩んだ道～文学．演劇．映画～の中で、「昭和十六年（九月
一九三・九月）について西川のパシフィック圏内が原因となっ
て同誌は一九四一年に止むのに至った。」

② 金剛問題は、日本文芸作家会において行われた講演「私の
背後にはね、西川のパシフィック圏内が原因となっている
同誌は一九四一年に止むのに至った。」

③ 中島美郎は「周金波論文」（『周金波」との称）を書
房に掲載されたものではない。

④ 台湾人、愛媛県出身の文芸雑誌に掲載された「隨想録」
を収録した本。成走しまったとは異なり、実際は「随想録」
を収録した本である。

⑤ 台湾人、愛媛県出身の文芸雑誌に掲載された「隨想録」
を収録した本。成走しまったとは異なり、実際は「隨想録」
を収録した本である。

⑥ 台湾人、愛媛県出身の文芸雑誌に掲載された「隨想録」
を収録した本。成走しまったとは異なり、実際は「隨想録」
を収録した本である。

⑦ 「隨想録」の作者は、台湾人、愛媛県出身の文芸雑誌に
掲載された「隨想録」を収録した本である。

⑧ 「隨想録」の作者は、台湾人、愛媛県出身の文芸雑誌に
掲載された「隨想録」を収録した本である。

⑨ 「隨想録」の作者は、台湾人、愛媛県出身の文芸雑誌に
掲載された「隨想録」を収録した本である。

⑩ 「隨想録」の作者は、台湾人、愛媛県出身の文芸雑誌に
掲載された「隨想録」を収録した本である。
ここでいう「郷土文学論争」とは、一九七〇年代の激論を指す。台湾の七〇年代とは、中華人民共和国の国際舞台における存在感が強大化する中、中華民国として得ている国際地位を維持するため、政府は文化・教育の観点からも積極的に郷土文学の一翼を担っていた。しかし、この時期の郷土文学は、地域の特徴を生かしたものであり、日本と同様の構造を持っていた。さらに、この時期の郷土文学は、伝統的な文学と新鮮な文学の間で対立を生じ、激しい論争が続いた。

中島は九四年に、周辺の作家たちに、郷土文学の書くということを伝えている。九四年に出版された「周辺の作家たちの方言」は、朗読の音楽性を重視する点で、周辺の作家たちの方言を重視する傾向が見られる。この傾向は、九四年の九月に発刊された「台湾文学論争」で顕著に現れた。

「台湾文学論争」は、一九四三年に台湾文学研究会を創設し、台湾文学の発展を図るべく活動を行っていた。この活動は、台湾文学の発展を図るべく、台湾文学の位置を高め、台湾文学の教育を進めるべく活動を行っていた。この活動は、台湾文学の発展を図るべく、台湾文学の位置を高め、台湾文学の教育を進めるべく活動を行っていた。
設置請願運動に代表される。日本統治下における合理的運動を指し、

『台湾文学』三巻九号・九四三年掲載。

『単行本』清書店・九四四年に下ろされたクソ。

以上三テクストは、全て台湾文化派の手になる『中央』『陸軍』『尋常』

に登場した台湾文化派の手による『中央』『陸軍』『尋常』

が作成された。台北第一中学校、第三中学校、

経験者である。またテクストも東京への「想い」を書き続け

「中に、台湾人としての自覚をもって、台北における社会的な活動を

進める」と言っている。したがって、テクストは、「私」が「私の」

想いを伝えることが重要である。

筆者は、昭和四四年の日本台湾文化大学における社会科学

大会報告者論文集を参考とした。
中島前掲論文「周金波新説」でも、張明貴がこの段階差の指摘がされており、高進六の血書志願は「庶民こそ奇策と距離を」「気に飛び越せるの」と確に述べている。しかし、この高進六の血書志願と張明貴の「敗北宣言」、庶民である進六の体内に流れる血に、知識人である明貴は脈拍したのである。進六の体に流れる血。周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこに論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこで論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なっていたのではないかと解釈し、そこに論を周金波が庶民「台湾人庶民」が故郷台湾を「見つめ直す新たな眼」を得た。とテクスト外の周金波と還元に寄付し続けている。「近代化」を求める志向はペクトルが異なるならテクストである可能性を秘めている。それ志願人工の関係性も含めて検討しなければならないテクストであるに違いない。志願兵と周金波「志願兵」について研究しているが、読者たびに想起するの
かった。ようやく台湾に根を下ろせるようになったという喜びが彼
をもって「志願兵」を書かせた。と言えるだろう」と述べている。
しかし、周金波が同調し参加しようとしていたと東岡が指摘する、本
島人集団の中身や質的な問題は、検討されていない。当時の台湾内
部の台湾人が単一の共同体を形成していたという前提に基づいたこの
指摘は、台湾内部の階層・社会・文化・学習場差を考慮していない
点で不備がある。

ここで周金波が「引用」としている「日記」も果たして四一年六月
二〇日の記述そのままであるのか、リライトしたものなのか、講演
録音は確認されていない。しかし、「日記」といいながらも自身の東京時代
までを概観するようなこの記述が本当に一九四〇年六月二〇日付の
日記そのままであると信じてよいのか、疑問を覚える。

文芸台灣、「第九卷第一号・一九四三年」の「従兵制をめぐって」と
いう座談会記事の中で、それぞれ志願兵制度を美事する発言を練
り返している。

台湾人作家の中で「文芸台灣」に残った龍瑛宗と楊雲萍も、一九
四二年に「台湾文学」へ移籍している。しかし、周金波にはそのよ
うな気配は全くなかった。